園 長 だ よ り NO110

2025.3.4

集団生活の中で育ったこと

あと２週間もすれば卒園式を迎える。
回想すれば湧き出んばかりの思い出がでてくる。「えんちょう　また馬鹿なことやってるんだねー　子どもみたい」と意見するぐらい流ちょうな会話ができる。時には客観的に物事をとらえ、大人びた考えを言うこともある。
接する都度にどの子も成長したと実感します。

今年のめろん組は小さい時からよく遊んでいたという印象がある。自分の好きなことをやりたいことをとことんやる。其れがゆえに喧嘩も多くあったのではないでしょうか
自分のやりたいことを選択すると当然自分と反対の思いを持つ子がいる。保育士が意図して設定して遊ばせていたらトラブル（衝突）は少ない、自分で（自分たちで）選んだ遊びはそれぞれが思いをしっかりともっているだけに意見のぶつかり合いはある。

大人がぶつからないよう交通整理をする保育を選んでいないだけに子ども同士の関係がしっくりいくまでは苦労したことでしょう。

年齢が低い時期は流ちょうな言葉はつかえない、自分の思いを十分に相手に伝えられずわかってもらえないことも度々ある。
噛みつく、たたく、時には取っ組み合いのけんかをする。大きくなり言葉で自分の思いを伝えることができるようになると感情もコントロールできるようになる。すぐにかっとする、怒る、手がでてしまう等の行為は徐々に減っていく、　子どもが(子ども達が)やりたいこと、やってみたいと思うことに取り組む中で
人との関係性を育み大切なものを学んで獲得してきたように思います。　まだまだ粗削りな部分はありますが歳を増すごとに育っていきます。

思いやりを育てる

「　思いやりを育てる　」という言葉を保育業界ではよく耳にすることがある。
大人が「優しくしましょうね」というだけでは思いやりは育つことはない。　思いやる相手がいて、自分いて成り立つ、ただ　やみくもに優しくしようということではない。

先に記したように自分の思いを出し、ぶつかり、相手に気づき、思いに気づき、それぞれの感情がぶつかり、対立したり、同化したり、同調したりと人と人とのかかわりやつながりがあり、はじめて思いやる場面に出くわし、その時の感情を経験し積み上げていくように思っています。

かかわる大人も実に忍耐強く、子ども達に接していただいたと思っています。

思いやりの心を育てるには子どもに対しておおらかな気持ちで接することが大切、おおらかな気持ちというのは子どもを許容できる気持ちと考えます。子どものどんな行動にも意味がある、意味を見つけ出してあげることを保育士は実践してきた、一見、大人から見て問題だなという行動も認めてあげようという気持ちで見守り、接していたに違いありません。

こうした情緒的な結びつきが成り立っているからこそ子ども達の情緒は安定している。子ども達は明るい、よく遊ぶ、そんな子ども達は表情も豊かで自分の思いも表現できる

やわらかいふっくらした赤ちゃんの時の手がいつのまにか大きく、時にはたくましさを感じるように変化してきたと同様に心も育っている。　その心で、手で、いろいろなものを創造的につくりだすことができるようになるとは、実に感慨深いものです。

思 い や り　（人が育つ土壌）

関わってきた先生には思いやりが人一倍あったのだろう。子どもの立場に立って考え、子どもの気持ちをくみ取れることができる　子どもを叱ることなどない。叱る気にもならないのだろう。　そんな先生だから子ども達なりに生活の中で秩序を保ち「自由」に行動できていたと思っています。

自分の感情を素直に出せるようになる。感情表現が先生や仲間に受け入れてもらえる経験があるから他人を受容しようと心も豊かになる。友達とのかかわりが持てれば、自然と仲良しになり、次から次へと遊びの中で発想が湧き出てくる。

豊かな生活はこうして作られるのだろうと回想する。

保育者は常に子どもを真ん中において子どもの生活を考えられる大人でいることが大切です。

大人の都合で子ども達を動かすことは避けるべきであり、大人が教え込むのでなく、常に一緒に学ぶスタイルを尊重したい、保育者が教え導くことも育ち中ではあるが 5 歳児にもなれば　「わかっている子にきく、教えてもらうことで　聞き手はより真剣に理解しようとする。　わかっている子は教えることでより理解が深まる。」

みんなで共に学び、育っていくことが大切と思っている。

めろん組さん　卒園まで１か月
　何して遊ぶ　　何がしたいのかな
　やれることは　できるだけ実現させて
　あげたいものです。

（おおぞら保育園　園長廣部信隆）

※　画像は現めろん組のりんご組の時です